

『海を見た日』を読んで

三木東中学校 二年 澤 涼帆

朝目覚め、自分のベッドから出て洗顔。そして朝食。何気ない一日が始まる。そして学校が終わって、家に帰ってきてほっとする。ごく当たり前の生活。しかし、この子たちにはそんな当たり前の生活がないのです。

この本に出てくる子どもたちには、様々な事情があり、本当の両親と生活ができず、里親に預けられている子どもたちです。そういった子どもたちの力になろうと里親を申し出た大人たちによって引き取られているのです。本当の親もそうですが、子どもたちにもそれぞれの事情があります。

この物語には、四人の子どもたちと一人の里親が出てきます。家事全般をひきうけている一番年上のナヴェイア。現実逃避から妄想の世界にはまり込んでいるヴィク。英語が話せないことから、いつも黙っているマール。そこへ新入りの里子がやってきます。クエンティです。読み進めていくうちにわかるのですが、彼は自閉症アスペルガーで、思っていることを口にできません。しかし考え方は実に大人顔負けで、観察力も高いのです。最後に里親のミセス・Kです。彼女の夫は里親になって社会貢献をしていたのですが、他界してしまい、残されたミセス・Kはその悲しみから立ち直れずに、育児放棄をしてしまいます。里子をほったらかしにしてしまい、

自室にこもってしまいう毎日です。登場人物の五人が五人とも、一つ屋根の下バラバラに暮らしているのです。

この時まで私は、里親のもとで暮らすことは大変で不自由で、幸せになりたくても他のみんなとはまた違った生活を送ることになってしまおうと思っていました。

そんなある日、母親のところに帰りたいいつも思っているクエンティンが、ヴィクの誘いで真の母親探しの旅に出ます。最初は四人の雰囲気もあまりよくない状態でしたが、行く先々で起こる出来事に対処していくうちに、今自分が置かれている人生に対する考え方が徐々に変化していきます。特に四人がこれまでに見たこともなかった「海」を目にした時、「自分の生きる世界に、こんなにも美しいものがあつた。」とつぶやきます。目には涙があふれ、「きつと自分がおかれている世界は、そんなにひどいところじゃない。」と考えるのでした。他の三人もきれいな海を眺め、これまでの自分の態度や考え方をプラス思考に変えていきます。

私は、主人公の五人が初めて海というものを見て、今置かれている状況から自らの手で脱することを心に誓い、勇気を奮い立たせたのを見て、海の美しさはそんな素晴らしい力を持っているのかと感心しました。普段当たり前のよう見ている海だけれど、いろいろな視点から考えてみると、実は人に感動を与えてしまうほどの雄大なものだったのだとこの時思えました。このように思えることから、今の自分がどれ

だけ幸せなのかが思い知らされます。

ミセス・Kも、四人の子供たちが勝手にでていったことに對して、これまでの自分を反省します。一緒に暮らしているそれぞれ五人が今をもっと充実させるためにはどうしていけば良いかを考え始めるのです。そして、「本当の家族」いやそれ以上の「家族」に今後なっていくのでしょうか。

私はこの物語を読んで考え方が変わりました。それは里親のもとで暮らすことも心の持ち方ひとつで人生が大きく変わっていくことがあるということです。自分の人生なのだから自分で変えていかなければいけません。どのような状況に自分が置かれたとしても、それがもう自分の人生なのだから、幸せになることをあきらめず、この物語に出てきた四人のように前向きに行動していかなければいけないと思いました。これから先、私自身にも大きな壁が立ちほだかるかもしれません。そんな時こそ彼らのことを思い出し、前向きに自分の人生を考えていけたらいいなと思います。

「海を見た日」の原題は、『ザ・エコパーク・キャスタウエイズ』です。意味は、「エコパークの漂流者たち」です。今私たちが置かれている状況を荒波にたとえ、その中を漂流している、そんな感じがします。漂流した結果、彼ら五人が「真の家庭」にたどり着けるでしょう。

この本の作者は、アメリカの里親制度で若者を支援する団体の指導者です。こうした制度の問題点をじかに見てきた人

でもありません。この制度を利用できる年齢を過ぎると、ホームレスになったり、罪を犯して刑務所に収容されてしまうなどの問題点があるそうです。

個人では解決できない状況がまだまだ多くあるからこそ社会全体で解決できる方法を探していかなければならないでしょう。この本は、そんな状況の中で私たちに「先に光が見えるところまで来た。」「もう一歩」ということを示しています。彼ら五人が幸せに暮らせる社会が来ればいいのにと本当に思います。